

# なかじきり

森鷗外

青空文庫



老いはようやく身に迫ってくる。

前途に希望の光が薄らぐとともに、みずから背後の影をかえりみるは人の常情である。人は老いてレトロスペクティブの境界に入る。

わたくしは医を学んで仕えた。しかしかつて医として社会の問題に上ったことはない。「※※  
えんあきゆうぼくをえり 彫 朽 木、  
ろうだいさせんをま 老 大 免 左  
ぬがる 遷」の句がある。

わたくしの多少社会に認められたのは文士としての生涯である。抒情詩においては、和歌の形式がいまの思想を容るるに足らざるをおもい、また詩が到底アルシヤイズムを脱しがたく、国民文学

として立つゆえんにあらざるをいったので、款かんを新詩社とあららぎ派とに通じて国風新興を夢みた。小説においては、済せい勝しょうの足ならしに短篇数十を作り試みたが、長篇の山口にたどりついて挫折ざせつした。戯曲においては、同じ足ならし的一幕物若干が成つたのみで、三幕以上の作はいたずらに見放みさくる山たるにとどまった。哲学においては医者であつたために自然科学の統一するところなきに惑い、ハルトマンの無意識哲学に仮りの足場を求めた。おそらくは幼いときに聞いた宋儒理氣そうじゆりきの説が、かすかなレミニスサンズとして心の底に残っていて、針路をシヨオペンハウエルの流派に引きつけたのであろうか。しかし哲学者として立言するには至らなかつた。歴史においては、初め手を下すことを予期せぬ境で

あつたのに、経歴と遭遇そうぐうとが人のために伝記を作らしむるに至つた。そしてその体裁ていさいをして荒涼なるジェネアロジツクの方向を取らしめたのは、あるいはかのゾラにルゴン・マカアルの血統を追尋させた自然科学の余勢でもあろうか。

しかるにわたくしには初めより自己が文士である、芸術家であるという覚悟はなかつた。また哲学者をもつてみずからおつたこともなく、歴史家をもつてみずから任じたこともない。ただ、暫ざ留りゅうの地がたまたま田園なりしゆえに耕し、たまたま水涯なりしゆえに釣つたごときものである。つづめていえばわたくしは終始チレッツタンチスムをもつて人に知られた。

歳計をなすものに中なか為じきり切きりということがある。わたくしはこの

数行を書して一生の中為切とする。しかし中為切があるいはすなわち総勘定であるかも知れない。少くも官歴より観れば、総勘定もまたかくのごとくにすぎない。

これが過去である。そして現在は何にをしているか。

わたくしはなにもしていない。一閑人として生存している。しかし人間はウエジエタチイフにのみ生くること能わざるものである。人間は生きている限りは思量する。閑人が往々棋ごを囲みかたをもてあそぶゆえんである。

あますところの問題はわたくしが思量の小児にいかなる玩具おもちゃを授けているかというにある。ここにその玩具を検してみようか。わたくしは書を読んでいる。それが支那しなの古書であるのは、いま

西洋の書が獲<sup>え</sup>がたくして、そのたまたま獲<sup>う</sup>べきものがみな戦争を  
いうがゆえである。これはレセプ<sup>プ</sup>チイフの一面である。他のプロ  
ドククチイフの一面においては、かの文士としての生涯の情力が、  
わずかに抒情詩と歴史との部分に遺残してウイタ、ミニマを営ん  
でいる。

わたくしは詩を作り歌を詠<sup>よ</sup>む。彼は知人の采<sup>さい</sup>録<sup>ろく</sup>するところと  
なつて時々<sup>じじ</sup>世間に出るが、これは友人某に示すにすぎない。前に  
アルシャイスムとして排した詩、いまの思想を容るるに足らずと  
して排した歌を、何故になお作り試みるか。他無し、未だ依るべ  
き新たなる形式を得ざるゆえである。これが抒情詩である。

わたくしは叙実の文を作る。新聞紙のために古人の伝記を草す

るのも人の請うがままに碑文を作るのも、ここに属する。何故に現在の思量が伝記をしてジエネアロジツクの方向を取らしめていくかは、未だまったくみずから明かにせざるところで、上かみにいった自然科学の影響のごときは、少くも動機の全部ではなさそうである。趙翼ちようよくは魏収ぎしゆうをそしつて「代ひとにかわつてかふをつくる人作家譜」といった。しかしわたくしの伝記を作るのと、支那人が史を修めたのとは、その動機に同じからざるものがあるかとおもう。碑文に漢文体を用いるのも、また形式未成のゆえである。これが歴史である。現在はかくのごとくである。

近ごろわたくしを訪うて文学芸術の問題ないし社会問題に関する意見を徴し、また小説を求むるものが多い。わたくしはその煩はん

にたえない。あえてあからさまに過去と現在とを告げて徴求の源をふさぐ。

顧炎武はかつて牌はいを室に懸けて応酬文字を拒絶した。この「なかじきり」もまた顧家懸牌の類である。

大正六年九月



# 青空文庫情報

底本：「日本の文学 2 森鷗外（一）」中央公論社

1966（昭和41）年1月5日初版発行

1972（昭和47）年3月25日19版発行

初出：「斯論」

1917（大正6）年9月

入力：土屋隆

校正：小林繁雄

2005年10月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# なかじきり

森鷗外

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>